

# 法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(75)

秋のお彼岸(後の彼岸)が近づいてきました。今年(2018年)は二十三日の秋分の日を「中日」として、二十日(2018年)が彼岸入りとなり、二十日(2018年)が彼岸明けとなります。お彼岸には、お寺やお先祖様のお墓をお参りして、いつも以上に清らかな生活を心がけてます。

今宵(こよひ)の秋(あき)の最中(もなか)なりける

お彼岸の太陽は、真東から昇って、真西に沈みます。あの世(彼岸)とこの世(此岸)が一直線に結ばれることから、「こ先祖様との距離も、一気に縮まります。お供え物をお持ちしてお墓に赴き、お盆にお送りしたご先祖様と、ひと月ぶりにお話ししてみたいかがでしょうか。

「拾遺和歌集」源順(水面の小波に映る月を見ながら、過ぎゆく月日を数えてみると、今夜はちょうど秋の最中の十五夜であったよ)今年(2018年)の中秋の名月(八月十五夜)は、お彼岸中の九月二十四日に当たります。身も心も澄み切った中で愛でる満月(満月)のように光り輝いていて、こえてくる虫の音の合唱も、吹き抜ける秋風も、きつと胸に沁みてくることと思います。

この歌の「月浪」には、「月の移り変わり」や、「月ごとの「月次」(月並み)」という意味も掛けられています。気づかないほどに少しずつ変化する月の姿を眺めながら、決

して立ち止まらない時の流れを感じているのでしよう。このように、私たちが生きる世界は、時計の針が動き続けるように、一瞬たりとも歩みを止めることがありません。これを仏教では「無常」と言います。満開の花もいつかは風に散り、ひとたび「無常の風」に誘われれば、人の命も消え行きます。この世は移ろいやすからこそ、人には「儚さを感じて心」が備わっているのです。

照る月浪を 教ふれば

「方丈記」序章(朝方に(人)が死に、夕方に(人)が生まれるといふ世の定めは、ちやうど水面に消えたり生じたりする水の泡に似ている。私にはわからない、生まれたり死んだりする人

たへか去る。また知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

は、どこからやって来て、どこに去って行くのか。また、これもわからない、(生きている間だけの)仮住まいなのに、誰のために心を悩まして(建て、何のために目を喜ばしませるだけの行いをするのだろうか)。



高尾山におけるお彼岸の先師墓地参り

## 折り折りの記 (109)

### 残る虫洞門明り甲斐の蹊

波多野 重雄

乾退助の祖は甲斐武田信玄に仕えた勇猛を謳われた板垣駿河守信形である。信形は天文十年(一五四七)上田の戦いで戦死した。遺児の正信が家来に守られ遠江掛川の乾備後を頼る。

正信は山内一豊に仕え、土佐に移った。正信に子がなく山内一照の次男正行を養子とす。子孫の乾退助は幕府討幕軍の先鋒総督府参謀として明治元年三月五日に甲府を占領した折、甲斐では信玄を尊敬する空気が強く、維新政府に協力を求めるには、改名に限ると判断して先祖の板垣に改名。結果、甲府の神官や浪人等が自発的に「断金隊」という義勇軍を組織して官軍に参加した。(高尾山健康登山の会々々)

## 訪 泰 国

### 遊 曼 谷

#### 伽藍仏像皆金晃

#### 道中安全持仏像

#### 一心祈願運転者

#### 誠実人柄晃朗

厚木市 荒井 一雄  
九刹が仏教徒ゆゑ ホテルのボーイ我に令掌 泰(タイ)国を訪れて曼(マン)谷(コ)に遊ぶ 何れの寺院の伽藍(建築)・仏像も皆 なんと黄金色に晃る… 車内に祀らる『道中安全』の念持仏に 一心に祈願なされる運転手さん… その誠実なる人柄は晃朗と晃る…

ここで注意されるのは、命と泡は同じではなく、似ているとした点でしょう。人の命には、どこからかやって来て、どこかに去って行くという「来し方行く末」が想像され、長明は、人の命を三世(過去・現在・未来)という「過去・現在・未来」といいう広い視野の中で捉えています。逆行することのない流れの中で、敢えてこの仮の世で心労の種を蒔く必要はないのではないかと語っているのでしょうか。実はここに挙げた『方丈記』の二節は、真言宗智山派の経本にある『無常安心章』という文章にも引用されています。『無常安心章』は、全体が三三〇字程の短いもので、つらつら世の無常を按ずるに、朝に花を玩びし紅顔も夕べには見るかげもなき白骨となり、という言葉で始まります。お通夜などの際に読まれる場合もありますので、お聞きになった方もいらつしやるかもしれません。

この『無常安心章』の一節と『方丈記』とを比べてみると、多少の違いはあるもののほぼ同文となつています。『方丈記』は、例えば神奈川県立金沢文庫に伝わる鎌倉時代の史料の中に、僧侶の覚書として、中国の詩文集『文選』とともに抜き書きされたものが見出されるなど、説法の中で無常を語る際に使っていた形跡がうかがえます。この『無常安心章』のような経本にも『方丈記』が引かれているという事は、文学作品が仏教に影響を与えた実例として注目されます。

なお、冒頭の「朝に花を玩びし紅顔も」の箇所は、藤原公任(九六六―一〇四二)が撰じた詩歌集『和漢朗詠集』が出典です。その他にも、後鳥羽上皇(一一八〇―一二三九)の『無常講式』や、浄土真宗の存覚上人(一一九〇―一二七三)の『存覚法語』、それを基にして作られた蓮如上人(一二一五―一三〇二)の『四一五(一四九九)の「白骨の御文章(御文)」などの類似が見られます。こうした無常を説く章句は、宗派の枠を越えて、広く一般に知れ渡っていたのでしよう。無常は、仏教の基礎となる教えなので、(無住「沙石集」(飛花落葉を見ては無常の風の迷れがたいことを知り、明るく澄んだ月を見ては煩悩の雲の覆いやすいことを心得るべきである)「秋」の下に「心」を付ければ「愁」という漢字になるように、とりわけ秋は物悲しさを感ずる折節です。お墓に眠るご先祖様も、月夜の静寂の中で、子孫のお参りを今か今かと待ちわびているかもしれません。(栃木北部教区普濟寺)